

「苦悩の谷は希望の門」

ホセア書
ヨハネの黙示録

第2章 14節～23節
第21章 1節～4節

説教 本庄 侑子 牧師

聖書は、主なる神とイスラエルの関係、そしてイエス・キリストと教会の関係を、婚姻関係になぞらえて語ります。花婿は主なる神、そしてキリストで、花嫁はイスラエルであり教会。この関係を自分自身の結婚生活を通して味わい、あなたもこの愛で妻を愛するようにと選ばれた人がいました。預言者ホセアです。

神はホセアに衝撃的な言葉をおかけになりました。「行って、淫行の妻と、淫行によって生れた子らを受け入れよ。(ホセア書1章2節)その後、ホセアの妻ゴメルは不倫に走り、2人の子をもうけることとなりました。

ホセアは北イスラエル王国の預言者として立てられ、王国が滅びていく時代に活躍したと言われています。ホセアの前には、豊穡をもたらすバアルに心奪われ、主なる神から遠ざかるイスラエルがいました。ホセアはハッとしたことでしょう。妻に対して抱いているこの悲しみ、憎しみは、神ご自身のイスラエルに対するものなのだ。ホセアは、神の心と一体となって語られました。

2章前半は神の厳しい裁きの言葉が続きます。13節でも、神は彼女を罰すると固く決意なさっています。しかし、14節から神の語りが一転します。13節に続く14節「それゆえ」ですから、本来、ここからは恐ろしい裁きの方法が描かれるはずですが、神がホセアに語らせたのは、彼女を受け入れ、救う方法でした。

神が彼女をお導きになったのは荒れ野でした。全てを失う荒れ果てた場所。同時に、イスラエルにとっての荒れ野は特別な場所でした。かつて神がイスラエルをエジプトから救い出し、約束の地に入るまでの40年間、手を取り足を取り、導いてくださった場所だったからです。

そんな中、彼女が目にしたのはぶどう畑でした。荒れ野にぶどう畑が現れるとしたら、それはただ神がお与え下さったからに他なりません。イスラエルは次々と思い出したことでしょう。これまで絶えることのなかった神の真実と、それに対する自分たちの不誠実を。

青ざめるイスラエルの前にアコル(苦悩)の谷が見えてきました。そこはかつて、アカン一族が滅ぼされた場所でした。彼らは、神に捧げる

べきものを自分のものとしたのです。アコルの谷は、罪を犯した結果、負うことになった苦悩を象徴する場所でした。人の欲望と神への反逆、罪による死と滅びの臭いが充満していました。

彼らは滅びを覚悟したことでしょう。しかし、彼らの目に見えたのは、神の怒り狂う表情でも、裁く手でもありませんでした。神は神である限り、罪を裁かないわけにはいきません。しかし、彼らが滅びるのを見たくない。彼らが見たのは、そんな自己矛盾に心を激しく乱し、はらわたが煮えくり返るほどに動揺しながら、ついに心を変えられた神の姿でした。

神がアコルの谷に彼女一人を突き落とすのではなく、彼女を口説いてまで一緒に行ってくださったのは、ご自分がそこに突き落とされ、滅ぶことを通して、アコルの谷に希望の門を開き、彼女を新しい門出に立たせるためでした。

14節以降の言葉を語りながら、ホセアは葛藤したことでしょう。神は正気か。何を言っているのか。そう疑いながらも、神の言葉を語られる中で、神の愛に打ち砕かれていきました。そうして涙を流しながら、不倫した妻をもう一度受け入れることとなりました。

教会は、主の日ごとに、日常生活を阻まれて、荒れ野やアコルの谷に誘われます。しかしそこで私たちの目に映るのは、私たちが思うあまりに、はらわたがねじれるほどに痛み、ついには自らの身に神の怒りと裁きを引き受けて死に、復活され、希望の門を開いてくださった、あのイエス・キリストです。

洗礼を受けるということは、アコルの谷で神のプロポーズを受けるといことです。神が私たちの罪を克服し、命がけで用意してくださった結婚指輪を我が指にはめていただくといことです。教会は新しいイスラエル。花婿キリストの帰りを待ちわびている花嫁です。永遠の契りを結んでくださったキリストが、文字どおり私たちを迎えに来て、永遠に共にいてくださる日が来ようとしています。その日まで、私たちは神に愛され、打ち砕かれながら、神の愛で人々を受け入れ、愛し続けるのです。

(記 本庄侑子)